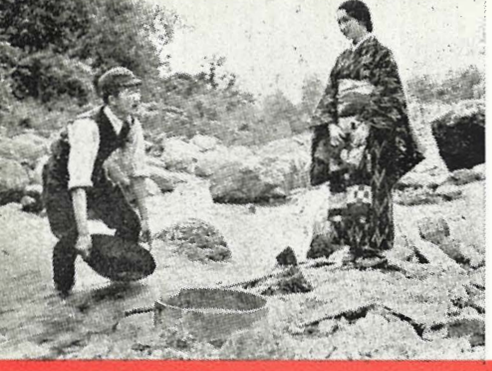

# 上映映画解説

1956, 5～6

国立近代美術館　フィルムライブラリー

No. 41

## 妻よ薔薇のやうに

### 「妻よ薔薇のやうに」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、毎週二回（日・水曜日の二時）歴史的な価値ある芸術性豊かな古典映画をとり上げていますが、今回はその第二一回として、五月二〇日から六月一〇日まで、トーキー初期の「妻よ薇薔のやうに」を上映します。

### 妻よ薔薇のやうに

PCL　一九三五年度作品　八巻

原作……中野実作「二人妻」より
脚色・監督……成瀬巳喜男
撮影……鈴木　博
録音……杉井　幸一

――キャスト――

山本俊作……丸山　定夫
妻　悦子……伊藤　智子
娘　君子……千葉早智子
お雪……英　百合子
靜子……堀越　節子
堅一……伊藤　薫
悦子の兄　新吾……藤原　釜足
精二……大川平八郎

〈解説〉

「妻よ薔薇のやうに」は、昭和一〇年に明治座で井上正夫が演じた、中野実原作の「二人妻」から、同年成瀬巳喜男がPCLで脚色・監督して映画化したものです。封切は同（一九三五）年九月一日に丸の内日本劇場で行なわれ、この年のキネマ旬報でベスト・テンの第一位を得、創立後間もないPCLが大いに面目を施したといわれます。成瀬監督自身「自作を語る」で「中野実さんの新派の戯曲ですね、『二人妻』。シナリオは僕です。それまでにもうトーキーも二本撮って、馴れましたからね、素直にやればいいと判って、別に気張ったりこだわったりして撮った作品じゃないのです」。（「キネマ旬報」一九五三（昭和二八）年七月一五日号）

と述べていますが、既に松竹で「夜毎の夢」「君と別れて」などのサイレントで好評を得ていた新進監督成瀬巳喜男が、トーキーにおける声名をたかめた記念すべき作品といえましょう。

又飯島正著「日本画映史」によれば、

「この画映は、のちにアメリカに輸出され、ニューヨオクのフィルムアアト劇場で上映された。純粋の日本映画が、アメリカで一般的に公開されたのは、これがはじめてであった。」（同書上巻、二一六頁）

ということで、トーキー初期のPCL時代の代表作であることと共に、映画史的に仲々興味があります。

なお、今回上映のプリントは、さきに入手した松竹の「路上の霊魂」「生れてはみたけれど」「隣の八重ちゃん」などと同様、当フィルム・ライブラリーのために、東宝に保存されたネガから新しくプリントしたもので、同じくPCLの「人情紙風船」（山中貞雄監督、三村伸太郎脚本、前進座総出演、一九三七年）も入手したので、近く公開します。

略筋――キネマ旬報第五四二（一九三五年六月一日）号から

女流歌人山本悦子は永年連れ添ってゐた夫の俊作が砂金を求めて山に行ってから、娘の君子を育てながら歌道に精進してゐたが、相合はぬ性格故に別れたものゝ年と共に俊作を懐しむ気持が湧いて来た。そうした結果からか悦子の詠む最近の歌はいづれも良人を恋ふ熱情ばかりであった。一日悦子を心配のあまり訪れた兄の新吾は、君子に父を迎へに山へ行って見てはと話した。丁度そのときある縁談の仲人にと頼まれた悦子の困惑を知った君子は、東京まで来ながら家へ寄って行かない父をどうしても連れて帰らうと心に決めた。芸者上りのお雪といふ妾と二人まで子を成し、贅沢な暮しをし、自分達を苦しめているのだと思ひ込んでゐた君子は、山の中の父を訪れて余りに想像外なのに驚いた。質素な住居、ふしだらな女とばかり思ひ込んでゐるお雪は髪結業をして夫の生活を助けてゐる貞淑さだった。俊作は君子にはもとより我が子ながら敬服してゐるのだが、どうしても東京へ帰る心ではなかったが、お雪の言葉に一まづ帰ることになった。必ず帰って来るとの約束のもとに、そして旅費にもと云ってお雪は娘靜江の嫁入りにでもと貯へてあった三百円を俊作に渡すのだった。すっかり俊作の気持ちの中に入ってゐる雪子を見て、君子は自分の母にはそれが出来ないと知った。帰って来た俊作はやはり夫婦らしい生活にはなじまなかった。仲人の役をすませば直ぐ帰るつもりの父、帰すまいと思った君子だったが、やはり帰るのが本当だと思はざるを得なかった。淋しいあきらめ。悦子も良人の出て行くのを止めることもしなかったが、いざ去ってしまふとやはり恋しさに泣くのであった。

### 「妻バラ」の頃の思い出

小林　勝

この映画は成瀬巳喜男氏が松竹からPCLへ移って来て、三本目の監督作品である。そして氏をして日本第一流監督の地歩を確立せしめた傑作であり、たしかこの年（昭和十年）のベスト・テンの首位を獲得した筈である。広島の原爆で死んだ丸山定夫君が主演しており、千葉早智子さんという当時PCLのピカ一女優も出ている。成瀬氏はこの美人とその後まもなく結婚

し、大いに羨望の的となったものだが、今は別れている。また「ママさん」とわれわれが呼んでいた英百合子さんも、このころは油の乗りきった時代で、いろいろなつかしい映画である。

原作は中野実氏の「二人妻」であるが、成瀬氏はこれをかなり自由に解きほぐし、独自のスタイルのシナリオに脚色した。近頃氏はあまりシナリオを書かないようであるが、昔は気のきいた、すっきりしたシナリオを書いたものである。当時PCLの文芸課には、私や松崎啓次君など二三人のシナリオ・ライターがいたけれども、とても成瀬氏のような才筆はふるえなかったものである。

その文芸課の部屋へ、ある日成瀬氏が入って来て、何かいい題名はないか、考えてくれと言う。

「二人妻」でいいではないかというと、

「原作と違うもんですから」

という。語調は静かだけれども、原作よりもはるかにりっぱに書きかえたという自負が、その表情にあふれていた。

何分昔のことで私もよく覚えていないが、このシナリオはたしかに原作の通俗味を脱皮していて、内容的にもはるかに高度なものに変っていたように思う。だからと言って、テーマまで変ってしまったわけではないのだから、何も原作の題名を毛嫌いするほどのことはないではないかと思ったのだが、脚色した当人が直接文芸課に相談に来ているのであるから、われわれも皆で考えて見た。

「尾崎紅葉に二人女房というのがあるが」とか、

「モリエールに何かそんなようなのがあった筈だが」

とか、こちらにも余り人材がいなかったので、成瀬氏の気に入るような、スカッとした題名はなかなか浮んで来ない。

「妻よ薔薇のやうに」というのは、撮影所の宣伝課の誰かがあてずっぽうにつけたもので、なまじっかシナリオを読んでいたら、こんな題名は考え出さなかったであろう。まるで映画の内容には関係のない題名だからである。

とにかく「妻よ薔薇のやうに」というのが成瀬氏の気にいって、きまった。

宣伝もジャンジャン売り出した。

ところが問題が起った。当時のPCL映画の封切館「日本劇場」から横槍が出たのである。

現在のように数十館の全国封切館の一斉封切というようなことはなくて、その頃は封切は「日本劇場」ただ一つ。地方大都市の封切でも翌週からということになっていたから、「日劇」は現在のロードショウ劇場よりも権威があった。その日劇の支配人秦豊吉氏が、

「妻バラという題名はいかん。日劇は〝二人妻〟でゆく」

と言い出し、頑としてきかない。だから日劇だけは、この映画は「二人妻」として封切つた。空前絶後の出来事である。秦豊吉氏も文筆家だから、原作の著作権を尊重したのであらう。その気持はわからぬわけでもないが、「妻バラ」で宣伝してしまったものを、封切だけ「二人妻」では営業上の迷惑は甚大である。

「二人妻」という原題を嫌った成瀬氏に全幅の賛意を表し得なかったわれわれも、秦豊吉氏の頑固さには一寸驚いた。そしてまたその横車を、易々として聴いた主悩部のダラシなさにもあきれはてた。もっとも当時のPCLは、東京宝塚（つまり東宝）の鼻息をうかがわねば、どうにもならぬ経済的事情の下にあったのは確かなのだが、それにしても製作者の面子はゼロである。映画がズバ抜けて傑れていて、PCLの名声を大いに高めた作品であっただけに、われわれは腹を立てたものである。

その頃松竹では「お琴と佐助」がトーキーで出たが他の日本映画の大部分はサイレント映画であった。PCL作品はすべてトーキーで、「妻バラ」はトーキー映画としても最初の最高作品であったわけである。